

Title	顎変形を伴う幼児顎関節強直症の1例
Author(s)	磯村, 恵美子; 榎本, 明史; 妹尾, 日登美 他
Citation	日本顎関節学会雑誌. 2012, 24(特別), p. 114-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89883
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

B-2-3-6

顎変形を伴う幼児顎関節強直症の1例

Management of mandibular ankylosis associated with mandibular asymmetry in infancy

磯村恵美子¹, 榎本明史², 妹尾日登美³, 古郷幹彦¹

¹大阪大学歯学部附属病院口腔外科1 (制御系)

²近畿大学医学部附属堺病院歯科口腔外科

³行岡病院歯科口腔外科

目的：顎関節強直症については数多くの報告がされているが、幼児の症例報告は少ない。今回、我々は1歳児の先天性と思われる顎関節強直症の1例を経験したので報告する。

症例：患者は2001年7月出生、出生時より左頬部に原因不明の骨様隆起を指摘されるも放置していた。2002年5月(生後9ヶ月)に某病院口腔外科を紹介され、治療法について説明を受けるもセカンドオピニオンを求め、当科紹介となった。2003年4月(1歳)初診時、顔面の左右非対称、オトガイ部の左方偏位および下顎後退、開口障害を認め、開口量は1mmであった。2003年12月(2歳)に左側顎関節形成術を行い、開口量が15mmまで改善した。その後FKO装着にて開口量を保持しながら外来にてフォローしていたが、半年後FKOの使用をなくなり、11ヶ月後には外来通院が中断した。2008年3月通院中であった小児歯科より開口量の減少を指摘され当科に紹介された。再診時、開口量7.2mmであったため、6月(6歳)左側顎関節再形成術を施行した。術後は開口量が20mmまで改善、術後はバイトブロックを作成し開口訓練を実施、術後2カ月で開口量25mmまで改善し、以後通院にて開口量が維持できている。

結果：幼児は治療の協力を求めるのが困難であるが、術後の開口訓練および通院の管理は重要と考えられた。今後、矯正治療を進めながら発育を待ち、仮骨延長などの外科矯正をする予定である。

結論：幼児の顎関節強直症の症例を経験したので報告する。